経済教室

エコノミクス・トレンド

個人主義と経済の関係は？

ポイント
- 個人主義と経済パフォーマンス、関係強く
- 日本の個人主義の度合い、実は中程度
- 文化を変えるより、多様性を認める社会に

大竹文雄
阪大教授

「日本人は集団主義的だ」という見方に対する是非の議論は古くからある。夏目漱石も晩年の『私の個人主義』と題した講演で「個」の重要性を説いた。「日本的経営」論でも集団主義的な面に着目し、これが戦後の高度経済成長の原動力になったとする見方も多かった。個人主義や集団主義は経済のパフォーマンスにどう影響するのか。

故・森嶋通夫ロンドン大学名誉教授は、戦前の日本人は国家主義的教育を受け、戦後の日本人は自由主義、個人主義的教育を受けたので、戦後の日本社会は国家主義的な価値観と個人主義的な色合いが混在していたという（『なぜ日本は没落するか』）。その結果、「子供は個人主義的、成績主義的、普遍主義的、平等主義であるように教育されているが、日本の大人の社会は頑強に集団主義、家父長主義、集団差別主義に固執している」と指摘した。こうした価値観の分断は1990年代はじめまで続いたと森嶋氏は指摘した。

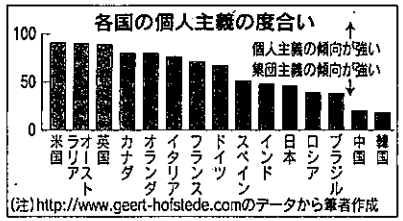
一方、日本人は集団主義的な傾向が強いとの見方に否定的な議論もある。小池和男・法政大学名誉教授は『日本産業社会の「神話」』で、日本人が会社を重んじ、厚生する部や課、職場の仲間を大切にするために個人間競争が少ないという意味の集団主義は「神話」であると実証的に論じた。査定による個人間の賃金格差が日本では大きいこと、「仕事の満足度」や「会社をよくするために働きたいと思う度合い」や「自分の価値観と会社の価値観の一致」などの指標は日本の方が米国よりも低いことを実証的に示した。

心理学者の山岸俊男・北海道大学教授は日本人が集団主義的に振る舞うのは、周りが集団主義的な考え方をしているからなだけで、本心から集団主義ではないと指摘する。

◆◆◆

個人主義的か集団主義的かをどう測ればよいのか。客観的な計測は容易ではないが、ここではオランダ・マーストリヒト大学の社会心理学者、ホフステッド名誉教授が作成した指標を紹介しよう。彼は米IBMの世界30カ国の現地社員へのアンケート調査を基に個人主義の度合いを国ごとに数値化。現在では対象を80カ国に広げた。具体的には、仕事や報酬に関する状況や価値観に関する30の質問を基に、個人主義の程度が一番高いと100点、集団主義が一番高いと0点と換算した。

同指標によると、最も個人主義の程度が高いのが米国の91点、最も低いのがグアテマラの6点である（図は主な国のみ掲載）。日本は46点で個人主義と集団主義の中間に位置する。欧州諸国の多くは個人主義的だが、スペインは51点と日本と変わらず、ギリシャは35点と日本より集団主義的である。アジアでは、中国が20点、韓国が18点と日本より個人主義の度合いが低い。



(注)http://www.geert-hofstede.comのデータから筆者作成

ただ日本人の個人主義の度合いが中ほどなのが、個人主義と集団主義の人が半分ずつなのか、中間的な考え方の人が多いのかは分からない。日本人は、個人主義と集団主義の両面をもっているからこそ、様々な議論がなされてきたのかもしれない。

◆◆◆

では個人主義の特性と経済成長にはどんな関係があるのか。チームワークが重要な生産形態である社会で、集団より個人を重視する価値観や行動様式をもった人が多いと、組織の効率は低下してしまうだろう。努力して得られた成果が、個人ではなくチームに帰属し、チームとして報酬や名声を得る集団主義的な社会では、チームのことを考えた行動を誰もがとるのが一番生産性を高める。

半面、新しいアイデアでも、チーム内の反対が強ければなかなか実行されない。新しいアイデアを実行すると、既存の方法で成果をあげていた人たちが活躍できなくなる場合は特にそうである。その場合には、既存の方法のもとで効率性を高めるような技術開発が支持されやすい。労働市場の流動性が低ければ、既存の人員でできることで効率性を高めていく漸進的な改善手法が選択されることになる。

豊かさとの相関強く
文化特性生かす工夫必要

一方、個人主義的な価値観が強い社会では、組織効率は低くなるが、革新的な技術進歩が生まれやすいかもしれない。技術革新の成果が個人の報酬や名声となって反映されるため、人々は個人の成果となるような革新的な技術進歩により努力するからだ。仕事の成功や失敗が集団ではなく個人に帰される社会では、個人が受けとるリターンが大きいが、その分負うことになるリスクも大きくなる。

技術の改善が重要な時代には集団主義的な社会が優位となり、革新的な技術が重要な時代には個人主義的な社会が尊ばれるのかもしれない。こうした観点で、個人主義の程度と経済成長の関連を分析したのが、米カリフォルニア大学バークレー校のゴロニチェンコ助教授とローランド教授だ。先のホフステッド氏の国際比較データを用い、1人当たり国内総生産（GDP）、生産性、技術革新との関係を分析した実証研究論文を昨年発表した。それによれば個人主義的な国ほど1人当たりGDPや生産性が高く、人口当たり特許件数も多いという。

ただこの結果は「豊かな国ほど個人主義的な文化が形成される」という逆の因果関係によるものではないかとの批判も出よう。彼らは、個人主義の強さの程度や豊かさと異なる第三の指標を用いて、この逆の因果関係の可能性を否定した。つまり血液型の分布など生物学的な指標を用い、個人主義の強さの程度や豊かさとの相関関係を分析した結果、生物学的な指標は、個人主義とは直接相関していたが、豊かさとの間には直接の相関が見られなかった。豊かになったからといって血液型の分布が変わることはないので、豊かさが個人主義的文化を醸成するという逆の因果関係を統計的には否定することができる。

◆◆◆

では個人主義的な文化が経済成長をもたらすという彼らの実証結果が正しかったとした場合、我々はどう対処すべきなのか。私たちの文化をより個人主義的なものに変えるべきなのだろうか。ゴロニチェンコ氏らは、文化はゆっくりとしか変わらないだけに、その文化に対応した経済政策を用いるべきだと提案する。

例えば集団主義的な国では公共財の供給が、個人主義的な国では分権的な政策がそれぞれより有効になるだろう。あるいは、個人主義的な国ではインフラストラクチャーをつくるプロジェクトでは組織的な支援を強くする必要があり、集団主義的な国では創造的な取り組みを促す努力をする必要があるはずだ、という。ただし彼らは文化と経済に関する研究はまだ始まったばかりの段階であると強調し、安易に政策に結びつけることには慎重である。

人間の生物学的な特性と文化との間には関係性が認められるという研究成果は、このほかにも報告されている。

例えば香野雅彦・玉川大学准教授らのfMRI（機能的磁気共鳴画像装置）を用いた神経経済学的研究によれば、個人主義的な考え方の人と集団主義的な考え方の人には、自分と他人との所得分配に関する意思決定に直面したときの脳活動の領域に差があるそうだ。つまり、自分だけではなく自分と他人の総和の所得が高いときに満足度が高くなる向社会的タイプの人は、個人の所得だけが満足度に影響する個人主義的な人に比べ、所得分配に関する意思決定の際、扁桃体と呼ばれる脳の部位の活動が高まるという。逆にいえば、所得分配に関する意思決定に直面した人の脳活動をみれば、その人が個人主義的な人か向社会的な人かを予測できる可能性がある。

こうした研究からみると、人間の経済行動は、遺伝や環境を基にする文化が影響を及ぼしている面があることは否定できない。文化は教育や家庭環境などで変わりうるとはいえ、グローバルな厳しい競争にさらされる時代になればなるほど、我々は自分の性格や文化特性を最大限利用できるよう工夫していくべきだということになる。

一方で、同じ日本人でも多様な性格の人がいる。個人主義的な人には革新的な技術やアイデアを創り出す環境を提供し、集団主義的な人には組織効率を高める環境を提供できるような社会にすることが大切だろう。多様な人材を活用する組織をつくる努力が私たちに求められている。

4人の筆者が交代で執筆、原則、月1回掲載します。